

## 論説 特集Ⅰ 幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の実際

### 「幼児期から児童期への発達や学びの特性を活かした教育を考える」

鳴門教育大学 木下 光二

#### 今、求められるもの

幼児教育は今、百年に一度の変革期を迎えていると言われている。幼保の一体化、待機児童解消、子育て支援、学校種間の連携や小学校教育との接続等の課題が山積している。児童期においても、不登校やいじめ、小1プロブレムや学級崩壊等の課題があり、枚挙にいとまがないほどである。時代の急激な変化に伴う社会構造のしくみや関係性の希薄さが影響を及ぼしていることは周知の事実である。このような背景の中、求められるのは時代の流れやシステムの変動に左右されない保育の質を保障すること、幼児教育が児童期はもとより、それ以降の教育と密接につながることはないか。幼児期の教育が充実してこそ児童期以降の教育が充実することになり、日本の教育の未来を支えることになる。

#### 連携と接続

昨今、全国的に連携に取り組む幼稚園や保育所、学校が着実に増えてきている。例えば北九州市では公私の区別なく全ての保育所、幼稚園、小学校に連携担当者を配置し、ブロックごとに連携に取り組む新しいプロジェクトに着手している。また、京都府舞鶴市では、指導要録の継続性から連携の重要性を認識し、地域ごとに保育や交流活動を公開し、幼児期から児童期に何をつなげればよいかの熱い議論を重ねている。全国の先生方や自治体の方々と話す機会が増えてきたが、豊かなで実りある連携が行われるようになってきた。

一方で、文部科学省が平成21年11月に実施した調査によると、連携がまだ十分ではない現状も見られる。連携の推進を図るためこれまでも様々な施策や方策をとってきたが、文部科学省においては、平成22年度に「幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」を設置し、同年11月に会議の報告を全国に向けて発信した。紙面の都合上、詳細には触れられないが、報告書は4章構成になっている。第1章では幼小接続における現状と課題、第2章では幼小接続の体系として、教育の目的・目標の連続性、教育課程の連続性、教育活動の連続性の3つの連続性を挙げている。第3章では、幼小接続における教育課程編成・実施上の留意点、第4章では、幼小接続の取り組みを進めるための方策が挙げられている。今や連携と接続は幼児期と児童期とを結ぶ車の両輪と考えてよいだろう。筆者も会議に参加させて頂いたが、有益な情報が掲載されているので、ホームページにアクセスしぜひ読んで頂きたい。

## 学びの芽生えから自覚的な学びへ

報告書第2章3の教育活動「学びの芽生えの時期から自覚的な学びの時期への円滑な移行」には、「幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えの時期から自覚的な学びの時期への円滑な移行をいかに図るかが重要となる。学びの芽生えとは、学ぶということを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいくことであり、幼児期における遊びの中での学びがこれに当たる。一方、自覚的な学びとは、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別が付き、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めることであり、小学校における各教科等の授業を通じた学習がこれに当たる。幼児期は、自覚的な学びへと至る前の段階の発達時期であり、この時期の幼児には遊びにおける楽しさからくる意欲や遊びに熱中する集中心、遊びでの関わりの中での気づきが生まれてくる。こうした学びの芽生えが育っていき、それが小学校に入り、自覚的な学びへと成長していく。すなわち幼児期から児童期にかけての時期は、学びの芽生えから次第に自覚的な学びへと発展していく時期である。」と記されている。学びの芽生えなのか学びそのものなのかの議論はさておき、幼児期に育っている学びに着眼し、児童期へとつなげることの重要性が問われているのである。

## 幼児期の発達や学びの特質

では、幼児期の発達や学びの特質とは何なのであろう。幼児教育の本質は遊びであり、環境との相互作用である。幼児が夢中になって遊ぶ時、身体全体で対象に働きかける。見たり触れたり感じたり考えたりしながら、五感を精一杯に働かせる。時には失敗や挫折もあるだろうが、遊びをよりおもしろくするために試行錯誤を繰り返したり、時間を忘れて遊びに没頭したりしている姿にその本質を見ることができる。その際、遊びの中に見られる学びの芽生えをしっかりと捉えること、捉えたものをわかりやすく発信することが保育者に求められ、連携や接続に向けての鍵になる。

## 学びの芽生え

学びの芽生えは特別なものではなく、どこの幼稚園でも日常的に見られるものである。例えば、幼稚園ではシャボン玉遊びの過程で幼児が石鹼を削ることから、石鹼を使った遊びへと変化していく姿がよく見られる。大根をおろすおろし金で石鹼を細かくし泡立て器で攪拌するとメレンゲ状に姿を変え、多様な遊びを創出する。ヨウシュヤマゴボウの色水づくりから、泡に色づけすることを思い付き、「ブルーベリーのスポンジケーキ」にしたり、お皿にふんわり盛りつけ、草花をトッピングしてレストランごっこをしたりする。幼児は、水の量をどれくらいにすればよいか、どれくらいの時間攪拌すればよいか、気に入った色を着けるにはどの草花を使えばよいか、どんな道具を使うと便利かなどを遊びという体験を通して学ぶ。同時に、固体の石鹼が水を媒介にすることで泡状に変わる物質の変

化や科学的な法則性なども必然的に学んでいる。

ある春の日、5歳児の花壇に文字が書かれた立て札を見つけた。読んでみると、「わたげ…」までは読めたが、後に続く文字は読めなかった。書いた幼児に尋ねてみると、「わたげをうえています。お願いだからふまないでください」と教えてくれた。「お」「え」「て」は字形が違って、「ま」は鏡文字になっていた。しかも、「お願いだからふまないでください」の文字はどこにも見当たらないが、「わたげをうえています」の中に、「お願いだからふまないでください」というメッセージが込められていた。

春になり、どこからか飛んできたわたげを拾い、種であることを知った幼児は、幼稚園の花壇に植えた。そして綿毛が無事に育つよう、誰にも踏まれないように願いを込めて立て札を作った。木材をT字型に組み、2本の釘を打ち付け、そこに自分の気持ちを文字にして表現したのである。何気ないエピソードだが、植物や自然に寄せる優しい思いや畏敬の念、文字を自分の思いを伝える効果的な伝達手段であると認識し自ら行動を起こした自発性や創作意欲などを垣間見ることができる。これらはまさに学びの芽生えであり、児童期以降の科学的思考力や言語能力、表現力や創造性、道徳性などにつながるものである。生き生きと、イメージ豊かに、楽しそうになどの抽象的な表現ではなく、遊びの中の芽生えている学びを丹念にみとり、可視化し、記録として具体的に伝えていくことが重要となる。

## 記録と発信

連携と接続は車の両輪であると述べたが、幼小の交流活動や合同の研修会などを実施しない限り、幼児の姿や芽生えている学びを小学校の教員が見る機会はそれほど多くない。そこで、幼児教育の側から幼児の育ちや学びを積極的に発信することが必要であり、発信のためには記録が鍵となる。保育記録を園内での情報共有や振り返りに活用するとともに、小学校に向けて伝える情報としてとても有効である。その際、事例として改めて書かなくても、週案や保育計画、指導計画等の中にエピソードを書き込んでいくことも可能である。幼児教育の豊かさが伝わってこそその連携であり接続である。幼小における教育観や教育理念の共有のためにも、発信する努力を重ねてほしい。記録に関しては、幼児教育課において新しい幼稚園指導資料集第5集「指導や評価に生かす記録（仮称）」が作成されつつある。記録の意味や重要性を考える際の参考となるので、こちらもぜひ読んで頂きたい。

## 接続に向けての教育課程

従来、幼児期と児童期は、同じ教育という土俵にもかかわらず、遊びと学習という隔たりがあったことは否定できない。だが、学びの芽生えを具体的に伝えることで、児童期へと連続させることはそれほど困難なことではないのではないか。

鳴門教育大学附属小学校では長年の教育課程開発の研究から、1年生の教科の枠をはずした学習を創り、幼児期から児童期への連続性を図る試みが行われてきた。例えば夏には

1年生と5歳児で自分たちが乗れるペットボトルの筏を作って遊ぶ。その際、ペットボトルを数える活動を盛り込むことで算数的活動が可能となる。また、生活科の学校探検と一緒にいき、探検で見つけた宝物で俳句を詠み、カルタを作って遊ぶことで国語的活動が可能となる。探検の中で、鯉や鶏、プランターや水道の数を数えたり、見つけたお気に入りのもので絵を描いたり歌をつくったりすることも可能である。秋には一緒に植えたサツマイモを収穫する際、大きさや重さで大中小に分けることで、1年生算数科の単元「3つの数の計算」を行うことが可能となる。いわゆる教科書中心の学習から、活動や体験を中心とする学習へと学び方を少し変えることで、両者にとって必然性のある学習を創り出してきた。もちろん、1年中、このような学習を継続するのではなく、1年生の教育課程の要所所に活動や体験を取り入れ、遊びから学びへの連続性を図ってきた。小学校で実施されているスタートカリキュラムの中には、このような様々な実践が行われ始めている。

現在、鳴門教育大学附属幼稚園をはじめ、上越教育大学附属幼稚園、神戸大学附属幼稚園、尾道市立中庄幼稚園などの研究開発校で、接続カリキュラムの作成が行われているので、その研究の成果や新しい知見にも期待したい。また、幼児教育課においても幼稚園教育指導資料集第1集「指導計画の作成と保育の展開」の改訂作業が行われており、接続カリキュラムのモデル事例が紹介されているので参照されたい。

幼児教育と小学校教育、異質なものが会うからこそ異なるものが見え、新しいものが生まれる。子どもの連続的な育ちや学びの姿はもちろんのこと、教師自身の力量を高めたり保育の質を向上させたりするためにも、連携や接続は大切なものだと考える。幼児教育の未来のために勇気ある1歩の前進に期待したい。

## 参考資料

「幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」

文部科学省報告書 2010

「幼稚園じほう」全国国公立幼稚園長会 2011,2012

「育ちと学びをつなげる幼小連携」チャイルド本社 木下光二 2010

「遊びと学びをつなげるこれからの保幼小接続カリキュラム」チャイルド本社

木下光二 2019

鳴門教育大学附属幼稚園、附属小学校研究紀要